

哲学者と自動人形 — デカルト

◎デカルトと人形

哲学者というと誰を思い浮かべますか？ プラトン？ カント？ ソクラテス？

しかし、「我思う、ゆえに我あり」で有名な一七世紀の哲学者デカルト^{*1}を知らない人はいないでしょう。ところで、このルネ・デカルトには実は不気味な噂があります。なんと彼は、等身大の精巧な美少女の人形をつくらせ、旅行にもトランクに入れて持ち歩いてきたのです。そして、船旅をしていたとき、その人形があまりに人間そっくりだったため気味悪がられ、船長に海に捨てられてしまったという……、そんな話があるのです。

人形に異常に執着する性的な嗜好があるようですが、デカルトもその傾向があったのでしょうか？ そもそもこの話、本当にあったことなのでしょうか？ いろいろ調べたところ、興味深い事実が見つかりました。デカルトは一生、正式な結婚はしなかったのですが、オランダにいた頃に、女中との間にフランシーヌという娘が生まれていました。彼はその娘をずいぶん可愛がり、将来は母国フランスで十分な教育を受けさせたいと思っていました。ところが彼女は五歳のとき、突然、猩紅熱^{しょうこうねつ}で亡くなってしまったのです。デカルトはひどく悲しんだそうです。

*1
ルネ・デカルト（一五九六—一六五〇年）。フランスの哲学者・数学者。近代哲学の父と呼ばれている。

*2
種村季弘著「怪物の解剖学」(河出書
房新社、一九八七年、参照)

*3
G・ロディッス・レヴィス著「デカ
ルト伝」(飯塚勝久訳、未来社、一九
九八年)参照。

*4
ウィリアム・ハーベール(一五七〇—
一六五七年、イギリスの医師、ガリレ
オがいたパドヴァ大学に留学し、科
学の手法を学び、血液の循環と、心臓
の役割を説明し、近代生理学の基礎を
きずいた。

*5
哲学と科学は、一九世紀まで、渾然一
体のものであった。現在、歴史上の哲
学者と言われている人物の多くが、自
然科学の研究に手を染めていた。デカ
ルトもその一人で、ハーベールの研究に
影響を受け、動物の生理に関する著作
をしている。(本書「ハーベール」参
照)

つまり、噂の人形は、その亡き娘を懐かしんでつくらせたものなどというのです。さらにこのフランシーヌの人形は機械仕掛けだったという話もあります。^{*2}とはいえ、夜、思索や物書きに疲れたデカルトが、部屋の片隅の少女の人形を見つめる様子を想像すると、どうも複雑な気持ちになってしまいます。

◎動物は機械である

デカルトの伝記では、この人形の話は単なる噂だとされています。^{*3}もしそうだとしたら、なぜこんな奇妙な噂が流れたのでしょうか？

時代は科学革命の頃です。ガリレオらが天体の動きを機械的なメカニズムとして説明してしました。ハーベール^{*4}というイギリスの医者は、この手法を動物の血液循環にも適用して、心臓はポンプの役割をしていることを実験で明らかにしました。デカルトはそれをさらに発展させ、動物の生命活動すべてが機械として説明できるという「動物機械論」を発表したのです。^{*5}それまで、動物には神秘的な靈魂のようなものがあり、それが動物を生かして動かしているのだと考えられていました。靈魂など神秘的なもので生命現象を説明するのは大変つごうのよい考えで、現在でも私たちの心の奥底では通用していません。

しかし、デカルトが発表した動物機械論は意外なほど抵抗なく社会に受け入れられま

した。それは、その頃になると、時計やポンプなどの自動機械が普及してきたためだともいわれています。それまでは自動的に動くものは動物だけだったわけで、だからこそ動物の体を動かす神秘的な力（＝靈魂）を想定していたわけです。ところが、自動機械の登場は、そのような神秘的な力など必要ないことを人々に証明して見せたのです。そのため当時の人々はデカルトの「動物機械論」を、驚きながらも受け入れたのでしょうか。

しかし、動物を含めた私たちの肉体が機械仕掛けでできているという考えは、理屈のうえでは理解できても、感情的には抵抗があります。この矛盾が人々の心に、「動物機械論」が不吉なものだと感じさせたのだと思われまます。そして、それを言い出したデカルトという人物も……。そんな不気味なイメージが、やがて「娘フランシーヌの自動人形」という奇妙な噂となったのでしよう。

◎機械に心はつくれない

しかし、もしデカルトが本当に亡き娘の人形を持っていたとしても、そんなもので心が癒されるでしょうか？ 精巧な人形を見ると、われわれは一瞬引き込まれます。しかし、次には、やはり生きている人間とは違う、という感じを受けるものです。それはいわば「生気がない」とか「魂がない」といったふうの違和感です。デカルトが仮に娘の人形をつくったとしても、または、ある人形に娘の面影を見つけたとしても、その違和

*6

ド・ラ・メトリ（一七〇九〜五二年）。フランスの医師・唯物論者。宗教界からの激しい攻撃にさいされる。

*7

ド・ラ・メトリ著「人間機械論」（杉捷夫訳、岩波書店、一九三二年）。

参考になる本

「デカルト」野田又夫著、岩波新書、一九六六年

感を感じとり、心は満たされなかつたでしょう。

デカルトは、人間の心は理性だけは機械にはつくれないと考えました。肉体は機械の原理で動いているが、心だけは神秘的なものだということです。この、心と身体を別な原理で考えようとした心身二元論は、デカルトが乗り越えられなかつた限界だと言われています。

その意味からも、一七世紀の科学革命は、生物学では中途半端なものでした。複雑な生命現象には、機械論は簡単には適用しにくかつたのです。それでも、デカルトの考えは生物学に影響を与え、少しずつ機械論的な研究が増えてゆきました。その結果、機械論的な手法が生命現象の解明に有効であるという考えが浸透してきました。そして約一〇〇年後の一八世紀、フランスのド・ラ・メトリという^{*6}医者が、人間の心までも機械として説明できる、という『人間機械論』^{*7}という本を出版しました。デカルトからこのド・ラ・メトリをへて、生物学は機械論的な考えで進められてゆき、一九世紀から二〇世紀に大きく花開くのです。

（細野春宏）